



2014年1月15日 発行

2014年冬号

<第25号>

編集・発行/社会福祉法人ワークスユニオン 代表/下野英世 〒551-0001 大阪市大正区三軒家西1丁目17-18 TEL06(6556)0881 FAX06(6556)0882 info@works-union.org http://works-union.org/tayori.html

## 来年は1位

きっかけは昔、ポルトの保護者かヘルパーが何かやってて、大会があつて出て楽しかったからユニオンでもやるつて言うたからやった。好きなポジションはアタックやけど、今は他ポジションをしている。本音はアタックをやってみんなに「おおー」と言われたいねん。以前は耳を塞いでた人が自分からひらに行つてるのを見たら周りのレベルが上がつてると感じるわ。

一番うまいのは○○さん。これは言わんといてや。

目標は、去年が3位、今年が2位、来年は順番的に1位！

でもあんまり練習が増えるとお金がかかるから困るわ。将来的には普通のバレーボールをみんなでやりたいと思つてんねんけどボールが硬いから難しいかもなあ。

榎原 みゆき

# 打込めるもの 見出して欲しい

したい事が無いからテレビが友の休日は、寂しい。移動支援のヘルパーを使って外出を楽しむのもたまにはよいが、それだけでは、つまらない。

利用者の皆さんにも、何でもよいので「趣味」や「スポーツ」などの自分が本当に打込めるものを見出し、休みの日にも、充実した時間を過ごして欲しい。

農家に育ち小さな頃より草花に親しんでいた私は、休みの日には草花や野菜の手入れに始終している。

とても高尚な趣味とは言えないが、私にとっては、趣味と実益を兼ねた休日の楽しみとなっており、日頃パソコンと向かい合っている私にとっては、ほっとできる貴重なひと時だ。

では、どんな障害福祉サービスが、趣味や楽しみを見つけて出す事や、それに打ち込む事を助けてくれるのか、私には全く思い付かない。

たぶん今の日本の障害者福祉は、障害を持つ人の「生きる権利」は保障するが、

「楽しく充実した生活をす

る権利」までは、未だに保障しなければならぬとは考えていないのだろう。

「生きられる」ことは重要。しかし、「生きられてい

る」だけではつまらない。

障害を持つ一人ひとりの利用者が、自分らしく、楽しく「充実感」を持って暮らして行けることが重要だ

と思う。

どこまでできるか分からないが、私たちは一人ひとりの利用者の打込めるものを見つけて「楽しみ探し」の活動に、これから努力していきたいと考えている。

(南石)

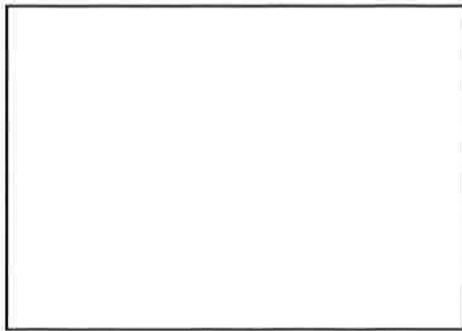
## ふうせんバレー

ふうせんバレーの取り組みは、以前にご紹介した通りですが、今年も六月・九月と大会に出場しました。

今年は大阪ふうせんバレーボール普及会の講師の方や全国大会経験のあるチームのリーダーの方に、サブやアタックの打ち方の指導を受け、大会に向けて猛練習をしました。その効果があり、九月に行われた関西大会では、一チームがシルバークップ(予選三試合のうち二試合勝ったグループ)で準優勝する誇らしい結果になり、クラブ全員で喜びました。この喜びの裏には、六月の大阪大会で経験した苦い出来事がありました。

普段の練習では強いサブやアタックを打つAさん。試合では球が決まらず惨敗してしまい、彼は「悔しい」とポツリと語りました。その表情は普段は見せないものだったので、彼自身が活動を継続できるのか?と職

員も心配になる程でした。しかし彼は、次の練習から休憩時間も休まずにアタックの練習を始めていたのです。その努力の成果があったか九月の「準優勝」に繋がったのだと思います。



つつあることを実感し、これまで取り組みが認められたようで、誇らしい一幕でした。

練習以外にも、活動が拡がりつつあります。十月には、関西大会での活躍を祝し、クラブのメンバーで「慰労会」を開催しました。これまで、職員と利用者で、お互いの役割を取つ払った形での打ち上げは開催したことがなかったため、開催するまでは、どのような展開になるか不安な一面もありましたが、いざ開宴すると心配は不要でした。

関西大会での一コマ。指導を受けた方のチームと対戦することになり、「こんなに強くなるなら、教えに行くのではなかった」と苦笑いされました。また、全国大会での優勝候補のチームと対戦した時は、我がチームの動きをビデオ録画されていきました。初心者チームから、強豪チームから敵視されるチームへ変わり

ある利用者は、鍋奉行を買って出る、またある利用者は、瓶ビールを持ってみんなに注いでまわる。普段、事業所やケアホームでは見ることが出来ない新鮮な光景でした。最後に、一人ずつ感想を述べてもらおうと、多くの利用者が「優勝」「全国大会」というキーワードを出していました。来年度は、大会に向けて強化合宿をすることも計画していま

す。

「運動する機会」を造るという目的の活動から「スポーツを楽しむ機会」に変わり、同時に「悔しさ」も味わう貴重な機会になっていきます。職員側も、大会で優勝できるように、精一杯力添えしたいと思います。

(高橋)

### ダンス教室

七年前、大正スポーツセンター開催の一般向ヒップホップ教室に、二名の利用者さんがヘルパーと共に通っていました。そこで出会ったのが、講師の瀬口先生でした。

その出会いが縁となり、日中活動の場に、先生がストレッチに来てくれるようになりました。

そして今度は、日中活動の場での先生とAさんと出会い。天性のリズム感を持つAさんを見て「この人を舞台上に立たせたい。」とひらめいたそうです。

そんな数々の出会いから、

ダンス教室がスタートしました。

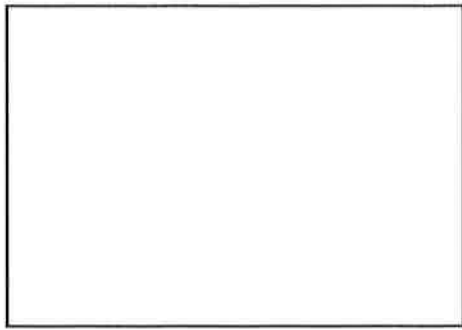
今年の四月から本格的に始動したダンス教室。十二月の舞台発表を目標に集まった利用者さんは八名。ダンス担当の職員も含め、皆ダンスは初心者です。慣れないヒップホップのリズムとステップに大苦戦。土曜日に月二回のペースで始めた練習では追いつかず、七月からは毎週月曜日夜も練習することになりました。

普段は何でも無難にこなすBさん。ステップを覚えられず、練習では後ろに下がって目立たない位置に立つとうとします。ある時、それが先生の目に止まり猛特訓。それでも出来ずに本人が諦めようとした時、「だめっ」と先生の喝が入りました。Bさんにとっては意外な一言に表情が変わりました。その後、先生と黙々と練習を続けました。

そう、先生はダンスのプロとして常に真剣勝負。先

生がモットーとする「信じて諦めないこと」の言葉通り、正直職員が難しいのでは、と思う踊りも果敢にチャレンジしていきます。それと同時に「発表に向かう過程が大事」と、練習でも手抜きはありません。

その毎回の真剣勝負がメンバーに伝わっているからこそ、誰一人脱落することなく発表の日を迎えることができたのでしよう。



彼らの底力を感じます。

メンバーの中で最も心配だったのがAさん。この舞台のきっかけを作ったAさんは、作業所でも家でも毎日予習復習は欠かしません。緊張のあまりパニックに陥り大声をあげることもしばしばです。この八ヶ月の間、先生もAさんに関わる職員も本番がイメージできるときのよう情報を伝達し、苦手そうな場面は演出などの工夫でAさんが舞台上に立てるよう配慮してきました。

リハーサルでは、職員の手を握りしめ、出演の順番や舞台装置、スタッフの動きを一つ一つ確認している様子が見られました。そして本番。舞台上ライトが照らされ曲が流れ出した時、メンバー全員が何とも言えない笑顔でした。たくさんの観客が見つめる中、緊張以上に「楽しい！」という気持ちが一緒に踊りながら伝わってきました。Aさんはなんと、自ら先生の手を引っ張って舞台上に立ちました。パニックどころか、乗りに乗ったAさんは先生とまさかのセンター争いをするという大演出まで成し遂げました。まさに客席と一体となった舞台は、初出演ながら大成功となりました。そして、メンバーは貴重な経験と確かな自信を得たようです。次の舞台は未定ですが、すでに次のステージに向かい始めています。

『ふうせんバレー』と『ダンス教室』の2つの活動から感じるのは、継続した活動には、活動自体を引っ張る講師の存在が必須です。同時に、職員の存在も必須です。彼らの変化を感じ、彼らの動きに合せながら継続できる工夫は、職員にしかできない仕事です。何か打ち込めるような継続した活動をどう支援していくのか、これから検討を重ねていきたいと思えます。

十二月一日の発表会当日。初の舞台を前に皆緊張した面持ちですが、それ以上に観てもらいたい気持ちが強いのか、リハーサルでは全員の動きが揃っています。

(坂田)



真理子さんは、立派に「お母さんのお葬式」の喪主を勤めたよ。

今年も何度か後援会の會員さんの訃報に接し、お通夜や告別式に参列させていただきました。

ワークスユニオンの利用者は平均で四十代後半、還暦を迎えた人も何人もいる状況だから、その親御さんの中にはご高齢の方もたくさんおられる。皆さんに出来るだけ長生きしていただきたいが、訃報を受けることも時にある。

つい先日のO家のお通夜の席に参列させていただくと、嫁がれているお姉さんのサポートを受けながら次女の真理子さんが喪主を勤

悲報  
下野理事長  
突然のご逝去

めている姿を拝見し、「よく頑張った。」との思いで、目が熱くなると共に、「子が親を見送る。」これこそが「親子の正しい姿だ」との思いを強くし、彼女に胸の内です。

私は、この仕事に携わるようになった三十五年前より、たくさんの保護者の方から、「この子より一日でも良いから長生きしたい。」とお言葉を繰り返してお聴きしてきた。制度が整っておらず、安心してお子さんを託せる場所を見つけることの難しかった時代を懸命に生きた皆さんのこの思いは、重々承知している。

しかし、これは世の中の道理に反しており、子が親より先に死んでいいはずがない。

お母さん、真理子さんのこれからの人生は、私たちが責任を持って守る。安心して「天国」から見ていて下さい。

平成十三年八月の法人設立時より、理事長として、ワークスユニオンの事業運営を物心両面で支え続けてこられた。

平成十八年に山川専務理事が急逝して以来若輩者の私が「施設長」として、何とか事業運営を続けてこられたのは、理事長の大きな支えがあったからこそ可能だったのだ。

今私は理事長の大きな支えを失い正直途方にくれている。しかし、故山川専務と下野理事長の「法人設立の想いを継承し、より高めていかなければならない。」との責任感も強く感じている。

下野理事長「長い間本当から歩み続けます。どうか天国より、ワークスユニオンの実践を見守り続けてください。(南石)

編集後記

▼ふうせんバレーとダンス教室の両方にスタッフとして参加しました。利用者さんと一緒に球を追いかけたり、ステップに悪戦苦闘しながら一緒に練習するのは、想像以上に楽しく貴重な経験でした。▼振り返ってみると、彼らと同じ立場で、何かに向かって必死に取り組むことは、意外になかったように思います。どこか、私たちが先導しなければ、とか、守らなければ、とか、

活動に参加する利用者さんに教えられるような気がしません。▼利用者さんの継続した楽しみを作ると同時に、この体験をたくさん職員にして欲しい。これからの課題になりそうです。(S)